



Vol.46

机の上の小さな変革



誤差と修正

こんにちは、菅俊一です。今回は、上達すること、洗練させることについて考えていきたいと思います。

まずはA4の紙を1枚と10円硬貨1枚を用意してください。A4用紙を縦に置いたら、その中心に10mm程度の小さな丸を描き、10円硬貨を紙の端に置いてください。その10円玉を指で弾いて、紙の中央に描かれた丸がきちんと隠れるように飛ばしてみてください。失敗したら、うまくできるまで同じことを繰り返しやってください。



いかがでしたか？ すぐにうまく隠せた人もいれば、なかなかうまく隠すことができなかった人もいるかもしれません。

うまく隠せるまでに行なったことを整理すると、①まずは1回やってみる、②やってみた結果を確認してゴールとの差を把握する、③やってみたときのパラメータ（力加減）と差の理由を考える、④パラメータを変更してもう1度やってみる、こういった流れを何度も繰り返しながら、だんだんとうまく隠せる状態に近づいていったのではないのでしょうか。

あわせて、「やってみた結果」に着目してみると、最初は大きく外れてしまったとしても、だんだんと外れる度

合いが一定の幅に収束されて最後に成功する、という流れだったと思います。

このプロセスは、何か新しいことを学んで習得できるようになるまでのプロセスでもあります。誤差に気づき修正を繰り返すことによって、だんだんと所作が最適化されて、精度が上がってきます。うまくなる方法に近道はなく、赤ちゃんが歩けるようになるのも、大人が仕事を身につけていくのも、同じようにこのプロセスを辿っています。そう考えてみると、失敗を恐れずにまず試すということをしないと、この習得プロセスのループに入れないことになります。

失敗を前提にチャレンジしよう

今回みなさんには、非常に単純なゲームのようなものに取り組んでいただいたので、やるまでハードルはとても低かったのではないかと思います。実際に新しいことを学ぼうとしてみると、まず最初にやるハードル自体が相当高く思えて、身構えてしまうこともあるかもしれません。

しかし、10円硬貨を飛ばすという単純なことでさえも1回めでうまくいくことがなかったように、何度もやり直すことが当たり前だという前提で、気楽にチャレンジしていく必要があるのです。



PROFILE 菅 俊一 〈SYUNICHI SUGE〉

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンデコノミクス』など。